

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第183号（2021年8月）



白井啓治

（二）ゲリラ豪雨に虫も意気消沈

（2008年9月4日）

『枕明かりに月を灯したら蚊に喰われた』

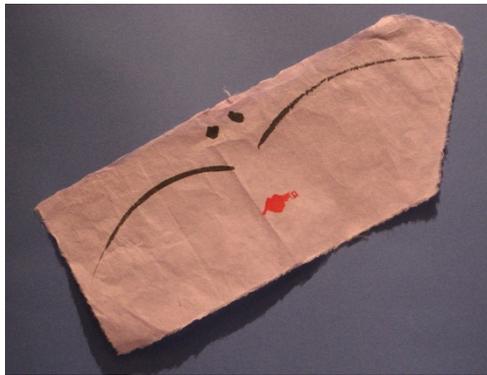
実に真夏とは言いにくい8月であった。冷夏ではなかったが、10日目以降は、日照時間のほとんどない8月となった。月の後半には、北海道で1、5度などという真冬の気温が記録された。局地的なゲリラ豪雨が、各地で予期しない水害を起こしている。何もかもが狂っていると思いたくなる。

焼け付くような陽射しがなかった所為なのか、庭木の枝に羽化したセミの抜け殻を沢山見つけるのであるが、何故かジイジイと暑苦しい鳴き声が聞こえてこない。まさか雌のセミばかりが出てきているわけでもない筈なのだが、やはり何か狂っているようだ。月末になり、連日のゲリラな激しい雷雨で、喧しくなる筈の虫の声も、元気がない。

昨夜のことである。雷雨がおさまり、瞬晴れて月が顔を出した。やれ珍しいことと窓を開けて、月明かりを部屋に招き入れたら蚊の奴目も一緒に

入り込んできて、頭のとっぺんにとまって血を吸って何処かに消えてしまった。柄にもなく枕明かりに月を灯して、などと文学少女のようなことを思ってみたら、途端に天罰を受けたような気分になされた。

それにしても今年は、虫の声にも力がないように感じられるのは、こちらの気持ちの問題なのだろうか。



（絵：兼平智恵子）

かなり以前のことである。気象学者が書いていた本だったと思うが、異常気象と騒ぎ立てるが、実は何も変わっていないのだ、というようなことが書かれてあった。古い本だったから、何時の頃の話だかもう記憶にない。その本の趣旨はこうであった。「地球全体の平均気温は何も変わっていない。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

い。局地的に移動しているだけで、それを世紀末のように面白おかしく書きたてている」だった。だから随分前に書かれた本だろうと思う。しかし、今は違う。地球の平均気温がドンドン上昇し続けているのだから、異常気象が起きて当たり前なのだ。その著者が、今も健在だったとしたら果して何と書くのだろうか。「これは本物の異常気象です！」と絶叫するかもしれない。いや、絶叫するだろう。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

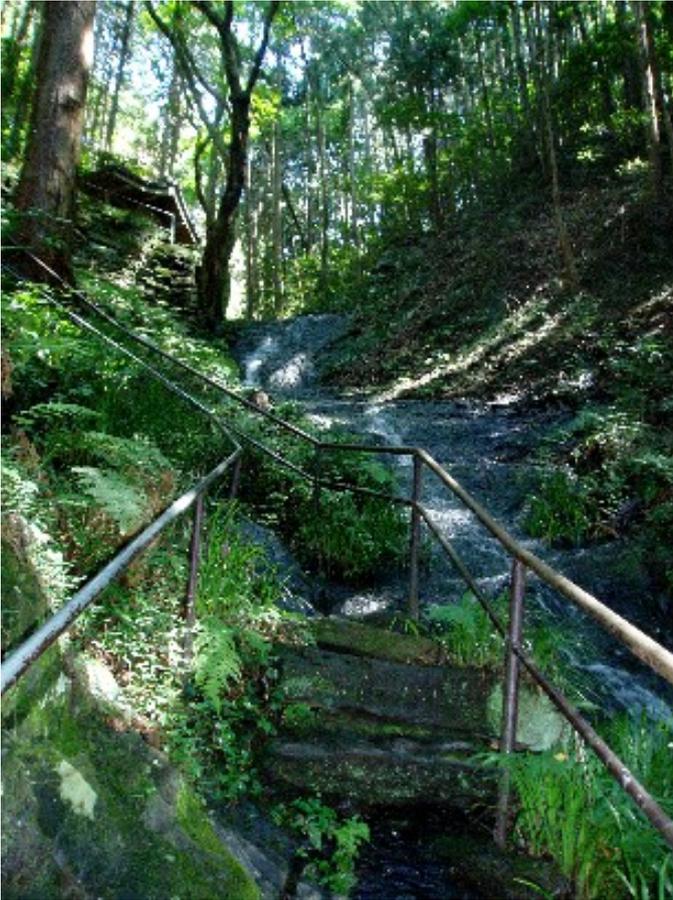
【6 真家・瓦会・有明地区】(2)

6.3 鳴滝と馬滝

一、鳴滝

旧八郷瓦会地区の山中(愛宕山へ続く、江戸壁という)にある。

恋瀬川の源流になります。水量はそれほど多くはないが20mほどの急な岩盤の上を勢いよく流れる滝は見事に自然と調和しています。瓦会地区の通りから入り口の反対側に標識があります。標識もしっかりしており、滝の近くには駐車場も完備しています。



鳴滝：夏場は結構涼しく感じます。こんなに町に近くてこれだけの推量のある滝も少ないでしょう。

鳴滝の名前の由来はこの滝がある時大きな音を立てたので、それで危険を察知して麓の人々が避難して無事だったという故事から来ているようで、昔天気予報の役目をはたしていたといわれています。

昔は滝前の平地に不動堂があり、巨竜のような藤の太木がまたがっていてみごとだったのですが、今はもうありません。

滝の脇にはしっかりとした手すりのある遊歩道が整備されていますので、誰でも気軽に登ることが出来ますが、少し急で足下が岩場です。無理は禁物です。滝の上部に不動尊があり、滝のまわりは険しい岩が多くみられます。

二、馬滝(うまたき)

真家地区にある弁円建立の明円寺より、山道を0.8km程登ったところにある。園部川の源流である。道は狭いながらも標識もあり明円寺までは舗装されているが、ここから800mはデコボコ道で注意が必要である。しかし最近滝の手前に3-4台車も止められる場所が確保されており、寺よりそのまま車でも行くことができ。馬滝の名前は滝の流れが馬のしっぽのように見えるところから来ているようだ。

滝は五段(落差は各段3-10m)に別れてつながっており、水量はそれ程多くはないがみごとな滝である。沢沿いに上まで登る事ができるが、遊歩道はないので注意が必要です。(10分くらいかかる) 見えているのは3段、4段目



馬滝：入口部に設けられた看板には「園部川の源流 幻の滝(二段目小絹の滝)」とあり。

の滝です。(5段目はもつと下の登り道から見える)

鹿子の木(カゴノキ)

「矢口家のカゴノキ」 場所は石岡市山崎風ケ沢1383であるが、地元の人以外はあまり通らない場所だ。ここは、昔は瓦会、部原地区と真家、岩間方面とを結ぶ街道であったという。調べてみるとこの道は水戸から筑波山への参拝の道で「瀬戸井街道」と呼ばれた道だと思われる。真家から厚茂峠を越えて部原(へばら)への峠越えだったのだろう。



この場所で矢口家は茶屋を営んでおり、旅人の労をねぎらったという。

このカゴノキは樹齢約250年も経つもので、道路に斜めに張り出したようになっていいる。奇妙だが、昔は周りに、他の木があつて邪魔をしていたためのようだ。

カゴノキは「鹿子の木」と書く。



鹿の子(バンビ)の体の模様に似ているためについた名前だ。木が大きくなるときに表皮が割れて模様になるといいう。主に温暖な気候のところに生える樹木で、茨城では珍しいそうだ。樹木もそうだが、馬滝(真家)から鳴滝(瓦会)

へ山伝いの道が、昔の街道であつたと聞くとか懐かしくなった。この一帯は、のどかな風景が広がり、その先に鐘転山(かねころばしやま)からの山並みが続いている。

ただ残念な事にこの木は通りに落下の危険があり、近年伐採されてしまった。

海外旅行の思い出(3) 木下明男

東ドイツの旅

D・D・R「第九演奏と音楽鑑賞の旅」は、1989/12/27～1990/1/4に企画された。北海道から九州まで、全国の労音合唱団を対象として募集された。集まった団員は300人を優に超え、二機のチャーター機で一路ベルリン迄・・・この時期、丁度ベルリンの壁が崩壊する寸前だったので、色々な意味で大変興味のある旅となった。

この企画が検討されたのは、ツアー実施2年前。前々年8月と前年7月、二度に渡って企画実現の交渉とツアーコース下見のため東ドイツを訪問した。ツアー実施二年前の時は、ロンドン(モスクワクラシックバレエ団視察)・ワルシャワ(アウシュビッツ訪問)を経て東ベルリンに入国・・・其々の国に比較して、ベルリンは道路が広く、整然として美しい街並み、随所にみられる公園、復元された歴史的な建物等々大変印象が良かった。良い印象には、もう一つ理由が・・・イギリス

やポーランドでは、冷えていない生ぬるいビールしかなかったが、ベルリンでやつとキレキレの冷えたビールに出会えたからだ。また、想像していたより物資が豊富で、各お店やデパートは賑わっていて、野菜や肉等の食料品もたくさんあった。夕方に、メイン通りにあるブランデンブルグ門を見学したとき、東西を壁で引き裂かれている現実を感じ、多くの若者たちが門の前に集まり、警備兵や壁に向かって叫んでいるのが印象的だった。

前年の訪問時は、ベルリンの他ドレスデンやライプツヒヒ、ポツダム等の各都市を見学。(ツアーのコース) 印象は、二年前と同様・・・特にドレスデン(日本で言えば京都の様な古都)は、落ち着いた雰囲気で心休まる思いがした。この時の帰国は東ドイツからチャーリーポイント(分断時東西ベルリンの国境検問所)を通り、西ベルリンに入りテーベル空港からフランクフルト空港へ飛んだ。よく言われている、東ドイツと西ドイツの違いを肌で感じ取れた、壁一つで遮られているがその雰囲気は全く違っていた。しかし、私には俗化している西ドイツよりは、整然としている東ドイツに郷愁を感じながら日本に帰っていった。

「第九の旅」本番は、ソ連をはじめとする東欧圏の変化が、メディアで日々報道されている最中、心配と変化した東ドイツを、この目で確かめようとの期待が入り混じる思いで旅経つ。冬のドイツは夏と違って、朝9時過ぎに夜明け午後4時には日没してしまう(夏は、早朝から午後11時まで明るい)しかも、排気ガスの影響か、1日中どんよりとした感じで、太陽を拝めることは殆どない。そのベルリンに到着してまず感じたことは、何処に行ってもたくさんの人出があることだった。

ブランデンブルグ門へ続く大通りはたくさんの人で溢れ、午前中はベルリン市内に向け、夕方になるとブランデンブルグ門に向かって人が流れていた。日本でのメディアの報道は、東から西へ行く人を中心に伝えているが、実際は多くの西側の人が東ドイツに来ている事実。昨年、一昨年の訪独時は、ブランデンブルグ門の前から100M離れたの見学だったが、今回は門の真下に立ち壁を直接触れた。しかも、壁の向こう側から、「コッソコッソ」と言う音が壁中に響き渡って、不思議な雰囲気を感じ出していた。今回は、ベルリン・ドレスデン・ライプツヒヒの三市を回ったが、道路を通行するのはベント等をはじめとする、西側諸国の車が目立ち、ホテルやレストランは何処もいっぱい、フリーでリザーブできなかった。

東ドイツでは食料や衣料等の生活必需品が安い。例えば、ハムや肉類は100グラム80〜120円、ジャガイモは2.5キログラム40円、医療は無料。そして、デパートやお店は何処に行っても買い物客で溢れていた。翌年より東西のマルクレートが1対1から、3対1になり状況により拍車をかけていた。どこの都市に行っても、オペラやコンサート劇場は復元若しくは新築されており、豪華で素晴らしいものだった。しかも、入場料は安く(240円から1500円)どこの劇場も満席で、チケットの入手は困難で、劇場の前は当日券を求めらるお客で長蛇の列、余り券を求めて外国人の我々のところへシツツココク言い寄ってきた。博物館や美術館もたくさんあり、その多くは無料か100円程度の入場料でたくさんの人たちがいた。文化や芸術に対して、手厚い保護と助成がなされている。これは人を大切にして潤

いのある社会生活を生み出す原点ではないか。現在の日本の文化における貧困さと比較して羨ましく感じた。

8日観世話をしてくれた、通訳のアンジェラ(昨年・一昨年も世話になる)がドレスデン空港まで見送り来てくれ・・・涙の抱擁で別れを告げ、機中の人となった。今回のツアー参加者の一人は、「今、社会主義はピンチではなく、寧ろチャンスなのだ」自らの知恵と努力で国造りが始まっている。暮らした質素でも、心豊かに生きている・・・と、感想を述べていた。私も同じ思いを感じ、また、何年かしてこの国の変化を見てみたい、どのように変わっているか・・・?



霞ヶ浦の赤い鯨

兼平智恵子

故白井代表が「ふる里とは、恋の降る里であり物語の降る里」のこと、この地をふる里と思うのであれば、恋も物語も沢山降らせなければと、髯女優小林幸枝さんと「常世の国の恋物語百」への挑戦をスタートさせました。

三十余りの公演の中、左記のポスターより



第十三回公演（ふるさと童話）霞ヶ浦の赤い鯨

上段は白井代表が朗読しているところで、残念ながら小林さんの手話舞がありません。

下段が（不思議の恋の物語）古里は春の夢小林さん、舟塚山古墳上で手話舞です。

今回はふるさと童話、霞ヶ浦の赤い鯨をご紹介します。

ヒロ爺のふるさと物語 霞ヶ浦の赤い鯨

（他4編）

著者 白井啓治
発行 ふるさと風の会 より

歴史の里石岡で一番大事にしたい舟塚山古墳の墳上から眺める常世の国の風景をモチーフに白井代表会心の不思議の物語の一つです。

葉津ちゃんも小学六年生のお姉さん、野之（の）君は弟で小学一年生。二人は大好きなおじいちゃん、よく舟塚山古墳まで散歩をしながら、いろいろな話しをしてもらいました。

葉津 「人が死ぬとゼロになるといのはどうい
うこと」

葉津 「人が死んだら天国に行くんでしょ」

おじいちゃん 「じゃ天国ってどこにあるんだね」

葉津 「皆がそういつてるからだからどこかにあるんでしょ」

おじいちゃん 「天国と言うのはな〜〜〜」

また違う日の事
でした。

葉津 「魂って何？」

おじいちゃん

「魂っていうのは、〜〜〜」

ある日

野之君が言いました。「僕マンタのヘリコプターに乗ったんだよ、下を見るとね、いろんな魚がいて泳いでいるんだよ。海はね、水の空なんだよ」



葉津 「それって夢みてたんでしょ」

野之 「夢って、寝ているとき目で見えるんだよ。起きている時の目では見えないけど、ほんとうのことなんだって。おじいちゃんがおしえてくれたよ」

「おじいちゃんに霞ヶ浦に赤い鯨がいたらいいね、と言ったら、いるさって言うんだ。

信じていればいつか必ず見られるよって言うから僕ズーツと信じていたんだ。そして

らみられたんだ。赤い鯨なんだぜ。すごいんだから。」

葉津 「赤い鯨なんているわけないじゃない。野之は夢を見てたの。本当のことでないの…」

葉津ちゃんがそう言ったとき、哲学者で詩人と言われているおじいちゃんの言葉が頭に浮かびました。もしかしたら夢だって本当のことかもしれないと思うことができたのでした。

霞ヶ浦の赤い鯨より一部抜粋
文中〜〜は言葉省略



県内最大の舟塚山古墳 翁
方後円墳）は、

大正十年に国の史跡に指定され、被葬者が謎のまま八十年以上大切に保存されてきました。平成二十五年度に物理探査（レ
ーダー探査・磁気探査）

が行われ、後円部墳頂では東西一四m、南北六mの埋葬施設とその施設の南西隅には鉄製品の埋納が予測される反応が得られ、前方部墳上では東西八m、南北二・五mの埋葬施設の反応が得られましたが鉄製品に関する反応は得られませんでした。

つまり、舟塚山古墳には後円部と前方部の両方に埋葬施設が存在し、後円部側には鉄製品が多量に副葬されていると推測出来る事になりました。

更に、鉄製品が武器だとすると、武器を多量に副葬する後田部の被葬者を男性の政治的・軍事的首長、武器をもたない前方部を女性の呪術的・宗教的首長と、それぞれの被葬者について想像することもできるそうです。

なお被葬者について知るもうひとつの手がかりには古墳の形にあるそうです。これにつきましては次回ご紹介したいと思います。

世界遺産に登録された大阪の百舌鳥（もず）・古市（ふるいち）古墳群の影響でしょうか、古墳をたずねて来石の方が多くなりました。

市内の小学生の皆さんも時には鋭い質問あり、楽しみながら学んでいます。

石岡市の宝物どうぞ大切に大切に！見学下さい。

参考資料 時の記憶

○酷暑に梅を干すついでにコロナも干したい
智恵子

館山海軍航空隊掩体壕 小林幸枝

前回紹介した千葉県館山の赤山地下壕から掩体壕（えんたいこう）へ向かう。

掩体壕とは飛行場の滑走路近くに敵機から見えないように飛行機を隠しておくコンクリート製の格納庫のことです。

軍事施設への爆撃から飛行機を守るため、掩体

壕は頑丈コンクリートで作られ、また上から分らないように上に樹木などを植えて分らないようにしていました。

館山海軍航空隊は横須賀海軍航空隊の機能分散を図るために関東各地に設置された施設の一つで大正11年に霞ヶ浦海軍航空隊が出来たすぐ後の昭和5（1930）年にできました。海軍航空隊としては5番目の航空隊でした。その後昭和20年（1945）年の終戦の時までには54の海軍航空隊ができました。

現在の館山市に沼（ぬま）から香（こうやつ）にかけての地区には、先程見学した射撃場跡や飛行機の部品や弾薬、食料、燃料などを保管するための倉庫、この「掩体壕」などさまざまな建物が造られました。

昭和14（1939）年の記録によると館山海軍航空隊には、97式艦士攻撃機を中心に124機の飛行機がありました。建設された当時の館山海軍航空隊の役割は、中国で行われていた戦争に飛行機を送ることでした。しかし、昭和16（1941）年に日本とアメリカが戦争を始めると、館山海軍航空隊は、東京、東京湾、太平洋岸を守るための基地として使われるようになりました。また戦争が終わった後に、日本軍からアメリカ軍に渡された記録によると、終戦の時には、零戦、紫電など41機の飛行機しか残っていませんでした。この「掩体壕」はアメリカ軍の飛行機に爆弾を落とされても飛行機を守ることができるよう全体が分厚いコンクリートで固められています。館山海軍航空隊や洲ノ崎海軍航空隊の周辺には40以上の掩体壕が造りましたが、現在

この近くに残っているのは、この宮城（みやぎ）のもの、香（こうやつ）に残っている大型の掩体壕の2つだけでした。皆さんもご興味がありましたら一度見学してみませんか。



新たな挑戦

5

菊地孝夫

梅雨が明けてから、連日のように暑い日が続く。今年もまた各地で、暑さの記録を更新するのだろう。

かくいう筆者も、情けないことには連日続くこの暑さには参ってしまっ、習慣化してもいいはずの原稿が全く書けない日々が続いてしまっている。

新たな挑戦、と意気込んでみたものの、数か月過ぎてても具体的になっってはいない。始めのうちは勢いに任せて書いてきたけれども、いま読み返してみると、これじゃあいけない、書き直したいな、という思いに駆られるものもある。

最近のように、地球温暖化が進行する現状ほどではなかったにしろ、昔も夏は暑かった。高温・水不足は直接飢饉につながった。時には冷夏もあって、それはそれで農作物に被害を及ぼすということもあつたけれども、ほとんどの年の夏は暑い日々が続いた。

太陽の日差しが照り付ける真夏に、真っ白く乾いた道には、ゆらゆらと陽炎が立ち昇っている。そちらこちらから聞こえてくるセミの鳴き声も、なおさらに暑さを呼び込むかのようだ。

そんな昔の時代に、当然、扇風機やエアコンなどの冷房機器は無いから、昔の人々は何とかして暑さから逃れ、少しでも涼しさを体感しようと、知恵を絞って様々な工夫をこらした。

もともと日本家屋は隙間だらけだから、涼しいはずだけれど、更に、蚊帳を吊って戸を開け放して、風が部屋を吹き抜けるようにした。

井戸に、西瓜や野菜を吊るして冷やしたり、ところてんを食べ、味覚の面からも涼しさを得ようとした。

裕福な人々は、川に船を浮かべて暑さを忘れようとした。

軒先に風鈴を吊るし、その音色で涼を得ようとした。生垣の朝顔の花も、涼しさを演出する一つだろう。

花火を打ち上げて、夜空に響くその音と光を楽しんだ。

怪談話を聞いて、その怖さに震えて、暑さを忘れようとしたりした。これなどは日本独自の感性と言えるかもしれない。

ともあれ、昔の人々は、この国の四季とうまく折り合いをつけて過ごすことになかなか長けていたようだ。

このところ、あまり外出はせずに、もっぱら携帯電話のユーチューブを見ていた。

なにか面白そうなものはないか、と見ていくうちに、日本に数年住んで居る外国人が、日本の印象を語っている幾つかの動画にたどり着いた。いずれも20代の若者が発信している。時間にして、10分前後のものが多く、これがなかなか面白い。

日本にやっ来て来た動機は、留学・仕事であったり、観光であったり、子供時代に見ていたアニメーションがきっかけであったり、と訪れた動機はさまざまである。

彼らはおおむね日本に好意的であり、発信している内容も、日本人の親切に感激したというもの、路やトイレの清潔さに感心したというもの。食べ物がおいしいということ等だけれども、それらのことをなかなか達者な日本語でもって話してくれているのも面白い。

これらはテレビなどでも、似た様なものがよく取り上げられている。治安の良さとか、規則を守るとかがよく言われる。

とはいっても、日本人の視点で作られた、大手メディアのものよりも、個人が発信したものがより本音がでているのではないかと思う。

店員の対応が丁寧であること、電車の到着時刻が正確であるということ、親切に道案内してくれることなども取り上げられている。

一つには、外国人（主に欧米人だけでも）に

多く接するようになったことも理由にあげられるだろうと思う。

以前聞いたのでは、街を歩いていて子供たちから「ガイジン」と指さされることが嫌だと語っていた。最近は外国人の姿がさほど珍しくなくなったから、割と普通に対応できるようになってきたのだろう。

電車の到着時刻が正確で、店員の態度が丁寧なのは、後になって文句を言われることが多いせいもある。

街路やトイレの清潔さは、割と最近の事だと思う。表通りはともかく裏通りはそれほどきれいではなかった。

食べ物のおいしさについては、どうやら個人差があるような気がする。

とはいえ、よその国の若者たちから褒められるのはうれしいことには違いない。

半夏生の頃

伊東弓子

御留川のこと、ある地域を歩いていた時だった。その日は、他に回ることはやめ波の上に見える石岡の方向に変形した姿の竜神山を眺めながらのんびりしていた。少し離れた木の下で西陽を斜前に受けて座っていた女の人がいた。御留川の話しても聞けたらと思ひ、近づいて声をかけた。私よりは年上と思われる。汗を拭きながら「待ってたよ」とばかり話しが始まった。女の人は名前を「つね」と言った。ぐみや木苺の花が咲き、実が

なる頃、あの日の出来ごとを思い出すと生涯の中でも悲しい日の出来ごとの長い長い話しが始まった。

『今は八十中半となつて年も大きくなつた。この土地に嫁して来てもう六十年も過ぎたよ。三十年前五代中半のおらは元気だった。実家は隣り村、舟で行けば直ぐだ。父親は弟夫婦と一緒に暮らしてつから、何も心配してねえかつた。』

夏草が茂り、草も伸びる忙しい頃だった。親孝行の真似事でもしようという話しが弟から持ち上がった。亭主は直ぐに「いいなあ・賛成だ」と喜んでくれた。妹夫婦も諸手を挙げての喜びようだった。細かい事は、妹夫婦が受け持つてくれる事になり、親父の希望を弟夫が確かめてくれた。親父は「西蓮寺さまに行つてみてえ」とのことだった。若い頃、祖父の使いで行つたきりだ。楽しみだと素直に喜んでくれた。そうなると次々に具体的にやつてくる。何で行くか。何時がいいか。寺への連絡、家族・特に子供らへの協力と、次々にやる事が出てくる。その一つ一つが、忙しい漁の合間に、農家の合間でも疲れが飛んでいつて楽しかつた。婆ちゃん（御袋）もいたら喜んでっぺな・・・と、思んでいた。田植えが終つた六月末はどうか、梅雨にも入るけど遊びだから雨が降つてもいいということになつた。交通の便を考えると一悩みだった。勤め人だった妹の家には小さいけれど車はあつた。四人は乗れる。弟の家には農作業用のトラックがある。二人乗りだ。おらの家には車がねえから亭主がなんとかするとう。働き先の地主の所からトラック一台を借りるように話を進めることにした。おらんちは田も畑も少ね

え、亭主とおれは終戦前の地主の家で仕事をして金を貰つてた。それが唯一銭の入る口だった。二人で働いても子供三人抱えて決して余裕はなかつたよ。家の事は子供らに殆んどやつてもらつての生活だった。戦争が終つて二十年位経つても終戦と共に入つてきた「民主主義」とやらは、随分變つて世の中をよくしたと、見・聞きしているが、どうしてどうして變つていない。子供等の言うことだけは一寸生意氣めいてきたが、又学校さ行くこともふえてきた。でも働かなきゃなんねえ。そうそう行けねえよ。何の贅沢もしてやれなかつた。今は父ちゃんと二人で出かけても子供等三人で何とかやつてくれつぺと、安心して出かける事にしてた。

働かせて貰つている・仕事を貰つている地主の家の人達は新しい憲法とか何も分つてねえみたいだった。言い返したり、無理をいうことは自然に口を噤んでしまい、言い出せないのが常だった。それでも何とかトラックは貸して貰えることになつた。出かけるその日を待つ樂しさは幸せだった。

いよいよ当日が来た。親父は妹夫婦の車に乗せてもらうことになり、それぞれが弟の家を集まることになつた。みんなが揃つたら西蓮寺さまに向かう事にした。ところが朝方になつて、おらは仕事にいかねばならなくなつた。昼までに終らせねばならない仕事をしてくれという。仕方がない。終るのを待つて出かけることにして、連絡はとつたが、この半日は何といたらいのか、どう仕様もなく辛さが胸を覆い、自分の惨めさが包んでいた。夫はどんな気持で待つてくれているだろう。それを思うと仕事を手につかない。早く時間が過ぎればいい。早く早く時間が流れてほしかつた。

遠くでサイレンが鳴っている。昼まであと二十分。片付けするのも軽々と体が浮いているようだった。家に向かつて飛んでいるようだった。朝作つておいた握り飯のうまいこと。頬張つた。車に飛び乗つた。二人で現実からの脱走だ。と待つていてくれた亭主に礼を言つた。結婚以来二人で出かけるのは初めて、西蓮寺まで行く道程は樂しかつた。仕事させられて遅れたのもまあまあ・いいかと思いなおしてみたりした。

門の辺りで五人は待つていてくれた。陽長の時期七人であつちこつちと歩いた。早苗の揺れる畔、盛りの紫陽花、寺の山には間もなく山百合が首を垂れて咲くだろう。秋には大銀杏が紅葉して境内を敷きつめることだろう。梅雨時とはいへ、天気には恵まれて足取りも軽かつた。住職は激しい風貌の中に優しさのこもつた語りで寺の歴史や自然、そして人生を語つてくれた。やがて冬の厳しさに堪えて春芽吹きを迎えるだろう。そして紡いでできた歴史はこれからも繰り返されることだろう。と坊さんの話しの中から悟るとまではいえないが、大きな気持になつて昼前までの己を恥ずかしいと思つた。この日の寺での夕食は、宴会までとはいかなくても親父を困んで、暫く振りに三人姉夫婦が楽しい時間を過ごせた。母親を亡くした後、一人でよく頑張つてきた父だ。「今夜は無礼講だ！」と、はしゃいでいた。兵隊へ行つた頃の話し、酒が入り歌がでて踊りもとび出した。弟も妹の旦那も私の亭主も後に続いて踊つたよ。笑いから涙になつて親父は大声で泣いていた。とつても穏やかな時間は、あんなひとときはその後二度となかつた。

朝早く目が覚めた男達は寺のお参りや、散歩を楽しんでるようだ。女姉妹はみんなの集まってくるのを待って、茶の用意をしていた。男たちは

昨日の坊さまの話しを心にとめて、しみじみ歩いていた。お茶を飲み始めて弟が、「大きい兄貴はトラックが必要だから朝戻ってきてもらえないかな」と言われてたので、朝早く帰ったとのことだった。みんなの雰囲気壊さないように、何も言わなかったんだと、察しがついた。ああ、気の毒だよ。喜んで出てきた蔭にそんなことがあったのか・・・と改めてあの地主の夫婦の根性を疑った。これは意地悪だ。嫌がらせだ・・・と思いたくないが日常の言動から十分考えられる。でも口に出せなかった。朝の美味しいお茶どき、個人の感情をまる出しに出来ないと思いがちでも、悔しくて掌を握りしめてたよ。地主には地主の予定もあつたんだらうと、思うようにして冷静さを保つ振りをしていた。誰ともなくあの野郎等のやりそうなこった、と言いつつ出かけたのきつかけに地主に対する悪口雑言が飛びかっただけとときだった。「兄貴の人の良さに免じてこの位にすつべ・・・」と、話しは打ち切りになった。朝食時、親父には朝の一杯の美味しさを味わってもらった。おらは妹夫婦の車の後座席、父の傍に座った。夫はどんな思いで昨日からいたのだろう。昨日私は隣でルンルン気分でした。夕べは賑やかな中でどんな思いで、ご馳走を摘んでいたのだろう。そして今日はみんなと共に出来ないことは後髪を引かれる思いで一人帰っていったのだろうと思うと、何年経っても忘れられない。そんなことを考えると、自分の心は重い。口に出さなかった父親は、出発時、

帰りに一緒に行動できなかった義理の息子のことをどんな思いでいたのだろうか。

その夏の終り、父親の命は終わった、という。人は沢山の出来事に耐え、多くの思いを抱いて生きている。それを持って次の世に行くのだろう。いまでも夏草の茂る道の草刈りをする時、言うに出来ない気持ちになると・・・聞かされた。おらもあれから年を重ね、父親と同じ年になったんだよ。亭主も十年前に亡くなった。今頃は親父とあれやこれやと話しをしていることだろうよ。おらもあの頃の父親と同じ八十五歳を過ぎた。元気でいくべえ。話しを聞いてもらって有りがとな。又会えつといいなあ』

と、立ち上がった。随分長い時間のように思えたが、短かったようにも思えた。目の前の流れ海が出来、人が行き交い、住み着き、長い長い時間が経った。その中で生きてきた一人一人が重い荷を負い、喜んだり悲しんだり、怒ったりしてきたのだ。

つねさんもその一人だったのだ。
私もその一人だ。



【風の談話室】

《読者投稿》

やわと暮らっ(54)

やわと女

遠縁にあたる農家さんから、お手伝い依頼(カボチャ収穫)の連絡が・・・前に、忙しいときには手伝うよと言ったことを覚えていてくれた？

・梅雨明けが待たれるこの時期、カボチャ収穫の最盛期。早速、お手伝いのため朝から出かけると、当家の御夫婦と男の手伝いの人たちは7時頃畑に行ったようだ。納屋の中には昨日収穫したカボチャが山積みになっていて、近所のお手伝いの方に教わりながら作業した。カボチャをタオルで1個1個拭いて、重さをはかり、6段階に分けていく。重い物は4キロ以上ある。軽トラからはほとんどカボチャが運ばれてくる。午後は出荷の準備。大きさごとに箱詰め。今日収穫したカボチャは大きな扇風機で、蔓の切り口を乾燥させる。この状態が暫く続くという。用事のない日は来るからねと言って夕方帰ってきた。ちよこっただけの農家体験でした。お手伝いのご近所さんの馬力半端じゃない・・・いちご家さんの手伝いと違って力仕事、今日は箱詰めした12キロものカボチャ沢山運びましたよ。大勢での手伝い楽しいです。

・梅雨入り直後、園部公民館主催「歴史散策石岡巡り」に参加、朝から雨模様だったが、幸い雨も上がり上々の旅となった。八郷ステキ旅案内人の渡邊さん、土田さんが同行し・・・常陸風土記の丘・常陸国分寺・舟塚山古墳・フラワーパーク・

ウイスキー工場などを見学した。お楽しみみの昼食は、石岡南台大石家の豪華お寿司。風土記の丘の大賀ハスはまだ咲いてなく、大方をガマの穂に覆われており残念だったが、アジサイが見頃だった。フラワーパークはあじさい、ダリア、そしてちらほらと山百合、バラも少しだけ咲いていた。新しくできた、八郷蒸留所(ウイスキー工場内)見学。あと6年もすると美味しいウイスキーが飲めるようです。無事公民館に戻り、皆さんの今日の歩数を見ると1万3千歩ほどありました。よく歩き楽しい1日だった。

・あれやこれやで1日が終わった。第一日曜日恒例の「そ・ら・ら」縁日に顔を出す。チャレンジシヨップ「まつのお舎」で、サンドイッチを食べる。八郷の中央公民館に移動して知り合いの民謡を聴く。そこから、いちご仲間と岡野ファームに移動。いちご家は、そのオーナーのお父さんと数十年ぶりに会い、手を取り合い涙の対面。娘夫婦が30年ぶりに実家に戻って来て古民家をリフォームし、お店を開店し有難い事だと語っていた。みんなでお父さんを囲んで昔話を懐かしんだ。その後、いちご屋さんに集結、またまた、大交流会が始まる・・・。

・梅雨明けしました。ひと月前に収穫しキープしておいた梅の出番、早速梅干し開始。大笨がなくこの日は、半分だけ干した。梅を干す作業をしなから、母が口ずさんでいたうたを思い出した。

「二月三月花ざかり、うぐひす鳴いた春の日のたのしい時もゆめのうち」
五月六月実がなれば、枝からふるひおとされて、

さんぢよの町へ持出され、何升何合はかり売く
へもとりすっぱいこのからだ、しほにつかつて
からくなり、しそにそまって赤くなり
へ七月八月あついろ、三日三晩の土用ぼし、思
へばつらいことばかり、それもよのため、人のた
め
へしわは寄つても若い気で、小さい君らの仲間入
り、運動会にもついていく
へましていくさの時、なくてはならぬこの
わたし

【うめぼしのうた】教科書研究センターによると、1910(明治43)年から全国で使われた小学3年向け国語教科書「尋常小学読本巻五」に載っていた。20(大正9)年に出た同教科書の第2期修正本にも掲載され、東京など1府7県で使われた。その後次第に使われなくなったという。また明治末期には音楽の教科書にも掲載されていたが、楽譜はなかった。「ひらけ！ポンキッキ」(1953年、フジテレビ)で、一部詞を変え曲をつけた歌が放送されたことがある。明治の国定教科書に載せられたもので広く国民に親しまれたうたと聞いている。女の一生を梅干しの歌としてうたっていたのでしよう。

・連日の猛暑、行きつく暇さえありません・・・？
きょうも猛暑日、園部地区の側溝管理の草刈り日、
作業者の大多数は老人ばかり、若い人はちらほ
ら・・・？みんな大丈夫かと心配しながら覗いて
きた。

おすすめの本 5

燕石(えんせき)

連日の暑さにかまけてしまつて、今月は本を読んではいません。というか、読む気力がわかないと言つたらいいのでしょうか。

何年かのサイクルで筆者に起きる、無気力症候群と言つたらよいのでしょうか。或いは、新型コロナの蔓延に起因する、ネガティブな風潮に染まつてしまったのか。

いずれにしてもいい兆候とは言えないのですが、何とか気力を奮い起こして、一文を書こうと思ひます。

そこで、今月は、(苦し紛れなのですが)おすすめの本の代わりに、映画を一本ご紹介することにしましょう。

DVDに収められた映画は、最新のヒット作を除けば、数百円という比較的手軽な値段で購入することが出来ます。レンタルで借りることも、インターネットで手に入れることも出来ます。

映画好きの筆者としては、これはうれしい限りです。

特典映像として、NGシーンや、インタビュ画像が付いていることもあって、これを見るのも楽しみの一つです。

題名は「The 5th Wave」
2016年のアメリカ・コロンビア映画会社の製作によるSF映画です。

「第五の波」とでも訳せばいいのでしょうか。

ここで映画のあらすじを紹介しますと、ある日突然、地球の上空四百キロに現れた、全長数百キロに及ぶ正体不明の巨大な宇宙船。

太陽の光は遮られ、その宇宙船によってもたらされる、地球規模の災害。地震や津波、そして深刻なウイルスが原因の疫病が広まっています。これによって、人類社会は壊滅的な打撃を受けてしまいます。

偶然だろうけれど、まるでこのところの現実の事態を予見したかのようなストーリー展開になっています。

第五番目の災厄は、地球外生命体が、人間に寄生して、人類を殺戮しまくり、最終的に人類を総て消し去ろうとします。外見は人類と変わらないので、見分けることができません、

この映画の主人公は、平凡な女子高生。一連の災害の中で、次々と両親を失い、たった一人の弟とは生き別れになってしまいます。

数百キロ離れた場所にあるアメリカ軍の基地に連れていかれた弟に会うために、少女は、「敵・エイリアン」の襲撃から必死に逃れながら、旅をします。

その旅の途中で、出会った若者とともに危険な状況の中、懸命に行動します。

一方、アメリカ軍の施設では、付近から集められた多くの少年少女たちに、「侵略者」と戦うための軍事訓練が施されます。

特殊なフィルターを通して見ると、エイリアンが識別できるということも教えられます。

ところが、これは実はアメリカ軍に化けた侵略者による作戦なのだということがだんだんとわか

ってきます。度重なる災厄を逃れた人々を、完全に根絶やしにするために、子供たちを巧みに洗脳して、兵士に仕立て上げ、人々を殺させようとするのです。

偶然この事実気付いた、一人の少年が数人の仲間とともに、この企てを破壊しようとしています。

ここに、主人公の少女と青年が合流し、共に戦いを始めます。

ここで、くだんの青年が実は侵略者だったということがわかるのですが、なぜか彼は人類の味方をするのです。

途上国の紛争でしばしば見られる、幼い少年兵の問題が下敷きにあるような気がする。子供は簡単に洗脳されやすい。

また、物語の途中では、全く見分けがつかないために、誤って普通の人間を殺してしまうという事態も起こります。

現実の戦争の中でもこうしたことは起こりうること。

アメリカ軍が、実は「悪」という描き方も珍しいのじゃないだろうか。

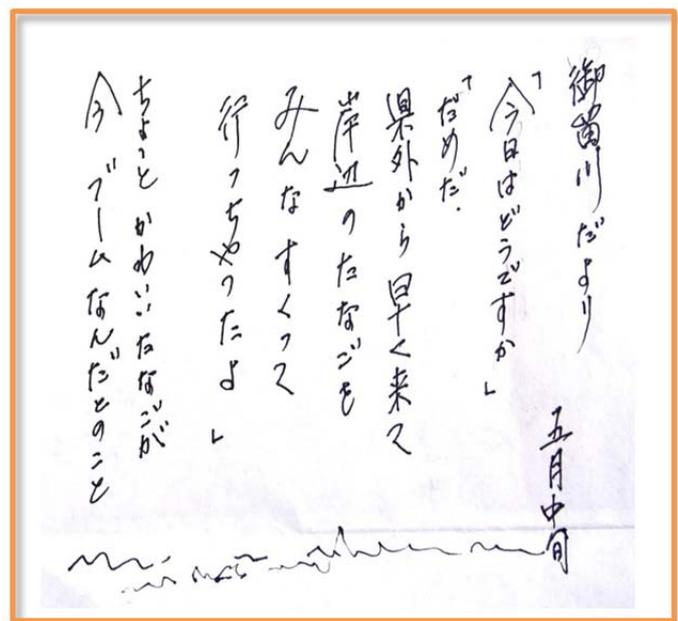
「インディペンデンスデイ」に描かれたようなステロタイプな、地球パニック映画とは少し違うようにみえる。

絵にかいたようなスーパーヒーローが、地球の危機を救うという、なんとも薄っぺらな設定はちつとも面白くない。

この映画の監督が、若い世代だということも理由の一つであるのかとも思える。

時折りこうした面白い映画に出会えることはうれしいことだ。

【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



茨城県の難読地名とその由来 (17)

木村進

大足 【おおだら】 水戸市

大足（おおだら）地名は関東各地にたくさん存在する。ここ水戸市（旧内原町）大足について、平凡社「茨城県の地名」には「大足の地名は関東に広く分布するダイダラ坊の伝説に由来し、その住した所と伝える」と書かれている。

この地の伝説は「常陸国風土記」の那賀郡のところにでてくる大男の話が元になっており、風土記には「大櫛といふ名の岡がある。昔、大男があて、

岡の上に立ったまま手をのびして海辺の砂浜の大蛤をほじって食べた。その貝殻が積もって岡となった。大きくくじったことから、大櫛の岡の名がついた。大男の足跡は、長さ四十歩以上、幅二十歩以上で、小便の跡の穴は、直径二十歩以上ある。」と書かれている。

この大男がダイダラ坊の伝説を生み、その足跡が「大足」となったといわれる。

そのため、ダイダラ坊が住んでいたところが大足で、実はこの地にクレフシ山（現朝房山）があるために、朝は日陰となつて人は朝寝坊であり、また作物も良く育たなかった。住民のこの嘆きを聞いたダイダラ坊は山を北の方向に移動させたのだ。ところがダイダラボウが山を動かした跡に大きな水たまりができてしまい、雨が降るとその水たまりが溢れ、村が水びたしになるようになってしまった。そこでダイダラボウはその水たまりを排水するため、指で大地を割いて川をつくり、その下方に沼を一つつくった。その沼がいまの千波湖であるという昔話もできた。

ただ、大足という地名は小字地名ではたくさんあつて、ほとんどのところが窪地のような地形のところにつけられた名前である。

これは昔の製鉄（砂鉄）跡ではないかと言われている。タタラ製鉄の跡のような場所に地名がつけられ「足」を「ダラ」「ダラ」などと読んだのではないかと推察される。

八郷町（現石岡市）の地名を集めた「八郷の地名」の中には、柿岡地区の小字に「大足（おおだら）」があり、「ダラ」は「タレ」で大きな凹の意か」と書かれている。また八郷町の太田地区にも「大足」「大足山」「大足前」という地名が残されている。

ここには、大男が足を踏ん張ったところが「大足前」で腰かけたところが「大足山」だという伝説がある。

足崎

【たらざき】 ひたちなか市

郵便番号簿の住所を検索しても全国に「足崎」という地名は無く、「たらざき」と読ませる地名も見つからない。地元「市報勝田」の昭和53年12月の記事でこの足崎が紹介されている。

それによると、佐和の上稲田が、竹箆などの特産地であったのに対し、足崎（たらざき）は篠で編む筵（ざる）の特産地として、近郷近在に知られていました。とある。

江戸時代にはこの篠細工が始められていたらしく、大半の家では農閑期、あるいは、夜業仕事として、筵などを作っていたと書かれています。また材料の篠は、おもに米崎（那珂町）、常陸太田の在りから買い入れ、筵を作るときの行程も分業化されていたと言われている。

足崎の地名の由来については、「日本地名辞書」からは、足崎の同一地名はみあたらないが、大良、多良、良川、足田の地名は福井、秋田、山口、佐賀の各県にみられる。一般にこれらの地名は、谷津が入り組んだ丘礫地上の平坦地を意味するともいわれている。

足崎には縄文時代の遺跡も残されており歴史の古い地域で、鎌倉時代には、常陸大塚の一族、吉田里幹が城を築いて住み、「多良崎氏」を名乗っています。鎌倉期には「足崎」ではなく「多良崎（郷）」と呼ばれていたようだ。

長兎路、長渡呂【ながとろ】

長兎路【ながとろ】 笠間市（旧友部町）

長渡呂【ながとろ】 つくばみらい市（旧伊奈町）

「ながとろ」という地名は全国的に見られる。「長兎路」などと「路」がつくが、けして道路などに関した地名ではない。そのほとんどが川のほとりにあり、川の流れが緩やか続くところにつけられた名前と言え。笠間市の「長兎路」は涸沼川。つくばみらい市の「長渡呂」は小貝川の流域にある。秩父の長瀬溪谷（川下り）が有名だ。

★全国の【ナガトロ】地名

宮城県亘理郡亘理町長瀨（ながとろ）

秋田県大仙市長戸呂（ながとろ）

山形県東根市長瀨（ながとろ）

山形県南陽市長瀨（ながとろ）

福島県田村市船引町長外路（ながとろ）

茨城県笠間市長兎路（ながとろ）

茨城県つくばみらい市長渡呂（ながとろ）

茨城県つくばみらい市長渡呂新田（ながとろしん）

埼玉県秩父郡長瀨町（ながとろまち）

神奈川県平塚市長瀨（ながとろ）

新潟県新潟市北区長戸呂（ながとろ）

新潟県新潟市北区長戸呂新田（ながとろしん）

福井県越前市長土呂町（ながとろちよう）

長野県佐久市長土呂（ながとろ）

岐阜県高山市久々野町長淀（ながとろ）

正上内

【しょうじょううち】 石岡市

【しょうじょうじ】

郵便番号簿の読みは「しよじょううち」であるが、「石岡の地名」の本では「しよじょうじ」と振り仮名がふられている。

「石岡の地名」(石岡教育委員会編)には名前の由来として次の2つの説が書かれている。

(諸説1)

特にこれと言った寺や神社もなく、庄内の高い部分にある村という意味ではないか。

庄内とすれば誰の領内か、北の谷に長者塚あれば長者の領内か定かでない。

(諸説2)

ここに兵力をあずかる小掾(しよじょう)が配置されていたと考えられる。「小掾内」が「正上内」に転訛したものではなからうか。ここに石岡北方の不備を補うために、兵力担当の常陸小掾が、相当の兵力を率いて常駐していたという想定は、決してあたらぬとは言えまい。将門時代、常陸小掾藤原玄茂が駐屯し、将門の石岡攻撃に策応して参加したものであろう。(赤木宗徳「将門地誌」)

まあ、最初の説は漢字の地名をそのまま考えただけのこと。この2番目の常陸小掾(ひたちしよじょう)がいたということは、明らかではないがかなり説得力を持っている。

常陸国は古代律令制では大国に分類され、大国には「大掾(だいじょう)」と「小掾(しよじょう)」が置かれていた。

大掾は権力を持ち、東国に土着した平氏の平国香(たいらのくにか)以来、次第に世襲となり、「大掾氏」となった。役職が名前になった非常に珍しい例といえる。

従って、この常陸国の国府であった現在の石岡には大掾氏以外に小掾(しよじょう)がいたことになる。常陸大掾であった国香は筑波山の向こう側の現筑西市東石田あたりに屋敷を構えていたとされていますが、常陸小掾がここに住んでいたのかなど何もわかっていない。

しかし、この平将門が常陸国国府を襲った時の様子は「将門記」に書かれている。

国府(石岡)の奥州方面の入口であったこの「正上内」地方に、この小掾を配して、国府の護りとして置いたものとの考え方はあつたとしても不思議ではないと思う。

しかし将門記では、この時の常陸小掾(ひたちしよじょう)(単に常陸掾ともいう)であった藤原玄茂(ふじわらの はるもち)は将門の国府襲撃の際には将門の味方になり、将門の重要な將軍の一人となつている。国府を守る兵士の数は三千人。攻める側の将門の軍勢は一千人。でもあつという間に国府は将門に奪われてしまった。

しかし、将門が討たれると、藤原玄茂も敗走して相模国で討ち死にしている。

土師【はじ】笠間市(旧岩間町)

下土師【しもはじ】茨城町

土師(はじ)については、土師器などと昔の土器などに時々使われていますので、それほどの難読漢字とはいえないかもしれません。茨城県に残された2つの土師地名は酒沼川沿いにあり、上流側が笠間市「土師」で下流側が「下土師」です。

平凡社の茨城の地名には、笠間市の土師地区には六万部・東ヶ峰に縄文遺跡、鍛冶ヶ谷には古墳時代から平安時代の製鉄遺跡があり、高麗神社古墳群など九つの円墳(古墳)があると書かれています。下土師について、角川の日本の地名大辞典では、地名は古代土師部集団の居住地であったことに由来するとあり、地内から「土師神主」と墨書された土師器が出土。縄文時代の下土師遺跡、小山台古墳群などがある。と書かれています。

また、室町時代(1435年の文書)には「下土師郷」という郷名があつたことがわかっている。

基本的には土師氏の集団が笠間市の「土師」あたりに住んでいて、こちらの下流側にもその同じような集団が住んでいたと考えられる。

土師氏は古代の古墳時代にその造営や埴輪の制作、神事儀礼などの儀式を執り行った豪族集団で、野見宿祢を祖先としていととされている。

下土師の少し南には埴輪を制作していた(焼いていた)釜などがある「小幡北山埴輪製作遺跡」がある。埴輪を作る職人だったので「はにし」と呼んでいたようだが、これに「土師」と漢字を当て、やがて「はじ」と読むようになった。しかし、地域によっては「はぜ」になったり、また人の名前などでは「どし」などと読む人も現れたといったところでしょうか。

全国の「土師」地名を調べてみました。すると、「ハジ」と読むところと「ハゼ」と読む所がきれいに2つに分かれた。「ハゼ」地名は三重・京都・

大阪・兵庫という旧畿内(五畿内)・山城国・大和国・河内国・和泉国・摂津国)地域であり、それ以外の地域は「ハジ」と読む地名だけだ。何故こんなきれいに分かれるのか不思議だ。

★土師Ⅱハジ

- 茨城県笠間市土師 (はじ)
- 茨城県東茨城郡茨城町下土師 (しもはじ)
- 鳥取県八頭郡八頭町土師百井 (はじめもい)
- 岡山県岡山市北区建部町土師方 (はじかた)
- 岡山県瀬戸内市長船町土師 (はじ)
- 広島県安芸高田市八千代町土師 (はじ)
- 福岡県嘉穂郡桂川町土師 (はじ)
- 長崎県諫早市土師野尾町 (はじのおまち)
- 大分県豊後大野市大野町中土師 (なかはじ)
- ★土師Ⅱハゼ
- 三重県鈴鹿市土師町 (はぜちよう)
- 京都府福知山市土師 (はぜ)
- 京都府福知山市土師 (はぜ)
- 大阪府堺市中区土師町 (はぜちよう)
- 兵庫県姫路市香寺町土師 (はぜ)
- 兵庫県たつの市揖西町土師 (はぜ)



常陸旧地考 (14)

菊地孝夫

下巻 (七)

○筑波山

名寄鈔、筑波山 嶺 河 神 云々
万葉集

雉の鳴く東の国に高山は左波に結いあり棚山の
貴山の伴柄立のみか石山跡神代従人の詞、国見の
為筑羽山云々。

また衣手常陸国に並び筑波山と、見んと欲して
君来たり、座登り熱に汗かきなけきねとり云々。

また万葉集に常陸歌十首のうち九首は、この筑
波を読めり、そのほかいと多し。

風土記に言う。古老曰く、昔祖神云々、それ筑
波の岳は高く雲に秀で、頂西の峰、さかし。これ
雄神という、登られず。東の峯四方岩石にして昇
り降りさかしく、その側に泉あり。冬夏絶えず、
坂より東、諸国男女、春は花の咲けるとき、秋は
葉の紅葉なるとき、相携えて連なり、飲食もたら
し、よじ登り、遊びすめり。その歌に曰く。

筑波峰に遊ばんと いいしこは誰がことに

けはか道 明日はけむや筑波峰に いほりて妻な
しに我ねむ よろは早もあけすかもや

歌う歌はなはだ多し。載せるに耐えず。

土地の言葉に、筑波峰の嬬歌に妻問にあえざれ
ば、娘と為さず。

*嬬歌の時、妻問いに逢わなければ、乙女とみ
なされず。

○滴田居

万葉集九卷に
草枕 旅の愁いを慰むる 事もあらんと
筑波峰に登りてみれば尾花散る しずくの

たいに雁がねも寒く来泣きぬ 云々
風土記茨城郡条に言う。西南近く、河有。信筑
之河という。みなもと、筑波の山より出でて、西
に従い、東に流れて、郡中を経て、高浜の海に入
る云々。

名寄鈔に
夜もすがら雫の山にうらぶれて
妻ととのうるさを鹿の聲

懐中鈔に
妹によりよしにや越ゆる雫山
何に露ケくなりまさるらん

現六
夕立の滴の杜の下草は
秋のよそなる露や置くらむ

新後拾遺に
そめてけり時雨も露もほしあへぬ
雫の森の秋の落ち葉

今新治郡に志筑村在る、即ちこれなり。この村
にそえて高浜に落ちる河有。これ即ち信筑川なり。

この川の北は古くは茨城郡なり、今は新治郡につ
けり。

さてシズクという名は雫も滴も仮字にて下附の
意なり。筑波峯より見下ろせば裾野の人家ども下
附ばかりに見ゆるによりてシツクの田居といいて
いまの志筑村のみにあらず。其のあたりを広く志
豆久の田居といへるより、今の志筑村の名となり
たるは、この村のあたり筑波ねより見おろしたる
景色のことに良きによりてこの地名とはなりしも
のなり。この田居をも田井とも書きしゆえ後の名

所寄などに井部に載しよりみな人井の事とのみ思
いてのちにはこの志筑村のうちにその井の跡なり
などいうものもいできたり。さて田井のと書きし
井字は仮字にて田居と書きしぞ正字なりける。田
居は即ち田舎のさまなり。田井ならぬことは万葉
集に

たずがねの聞こゆる田井に五百人して云々。ま
た、春霞たなびく田居に庵して云々、また、たけ
のしりたままく田居にいつまでか云々。また、お
おきみは神にしませは赤駒の葉らば蓋いて都と拿
室などアルにて、田居（でんきよ）のことなるを
知るべし。

○鳥羽淡海 トバノオウミ

万葉集九卷に

新治の鳥羽淡海に秋風に白波たちぬ云々とみえ
たり。

また風土記筑波郡の条に騰波江あり、一本に新
治郡とす。これもトバエと読みてひとつなるべし。
この湖今ある所を知らず。志筑村の地内にトリバ
ミという地字ありトリバミの橋といういささかな
る橋あり。これらよしありげに思えど、なおよく
よく考えれば、万葉の歌によりてのちの好事の徒
もの偽り儲けたるものとぞ思はる。そは風土記
にいわゆる、信筑之川はいまも志筑村の地内を流
れて高浜の海に落ちる川にて風土記と今とよくか
なえ里。いまトリバミというあたりはこの川沿い
にてむかしもなお田面にて在りしこと疑いなし。
扱て鳥喰という地名は所々村々にありて鳥の多
くつく所なり。

この志筑村のもそれなるを音に通う鳥羽海と後
の人の付会したるものなり。

ある人の説に、真壁郡大寶村の沼なりと言える
は誤り也。万葉集の歌に滴の田居と鳥羽淡海と人
目に見渡したるさまなるなはず。また新治之鳥羽
淡海あるをや、また、僧の恵岳が万葉集傍注には
高浜の海を言うにやといえりなおよく考うべし。

○葦穂山 アシホノヤマ

万葉集に

つくばねに曾我日に見ゆる葦根山云々みえたり。
賀茂真淵の説に、下野国の足尾山なりと言へるは
誤りなるべし。

常陸歌に他国のを読むべくもあらず。

風土記新治郡の条に、郡より東五十里笠間村在
り。越通し道路に葦穂山云々とみえたり

今筑波山の北に足尾山有、これ成ること疑いな
し。足尾と書くは後人の仕業にてついに足尾の病
をおさむ神とせり。俗の甚だしきものなり

○枳波都久岡 キハツクオカ

万葉集一四卷に岐波都久之岡よ久君美良云々。
注釈に常陸国真壁郡に風土記に見えたり云々と見
えたり。されど風土記に見えず。

國誌に真壁郡枳波都久岡あり云々みえたり。さ
れどこの地いま郡中にある所を知らず。

○柗藻山 タナメヤマ

万葉集十一卷注釈に、常陸の多珂郡柗藻山をも
風土記の歌にはみちのしりたなめの山と詠めり
云々。

國誌に風土記に曰く、柗藻山常陸国に在りと思
えたり。

○曝井 サラシイ

万葉集一四卷に

みくりの中に向有曝井の云々と詠めり。

加茂翁のこの歌の考え、武蔵なるといえるは誤
りなり。これは武蔵小埜沼の歌の次に那賀郡曝井
歌とあるは武蔵の那珂郡成富の誤り也。これによ
つて、千蔭が万葉にもむさしといえり。されどこ
の歌の次に手綱濱の歌有れば全く常陸の曝井なる
こと疑いなし。また文字も武蔵のは、那珂とのみ
あるを、常陸のは、延喜式風土記などには那賀と
有りてこと同じ。風土記那珂郡の条に泉出坂中
多流尤も清これ曝井という云々みえたり。
また続日本紀に常陸曝布依舊貢之なども見えた
れば、常陸と定むべし。

和名鈔に那珂郡洗井郷あり、これもサラシ井と
読みて同地成ること、郷名の条に言えるがごとし。
いまある所を知らず。

○手綱濱

万葉集一四卷に

とおつましたかにありせば知らずとも

手綱の濱の尋ねきなまし

うへの曝井歌につきて手綱濱とのみあるは常陸
のなればなり。高尔有世婆は、多珂にありせばな
り。多賀郡に手綱村在り、これ成ること疑いなし。

藻塩草、秋寢覚などに紀伊国とあるは皆誤り也。

○浪逆海 ナサカノウミ

万葉集一四卷に

ひたちなるなさかのうみのたまもこそ云々

仙覚鈔に、常陸の鹿嶋崎と下総の海上とのあわ
いより、遠く入りたる海なり。末は二流れなり。

風土記にはこれを流海と書けり。今の人は内の海となん申す。その海一流れは、北の方鹿島郡と南の方行方郡との中に入れり。一流れは北の方行方郡と下総との堺を経て信太郡、茨城郡まで入れり。しかるにかの内の海潮の満つる時は、浪殊に遡る義により、浪逆海というべきなりけり云々見えたり。

いま案ずるに信太郡と新治郡行方郡との間に入りたる方を霞浦といい、行方茨城新治の三郡に渡り、入りたる方を浪逆浦という。この海今なお浪荒く、土地の人西浦と言いて船人もかしこむ荒海になんある。今は行方郡と下総の香取郡との間に十六嶋（この島いつばかり頃にいできけむさだかに知られず）とて島々出来てさえ、風波荒き時は船うちやぶることままあり、ましてこの嶋なかりけむ古は、荒海なること知られたるにより、おもふに、浪険の海なるべくぞおぼゆる。

さて、わが高浜を南条荘という。この南条というは浪逆の名の残りたるなるべくおもはる。そは古木郡図に情浦（ナサケナサカ通音なれば借り用いたるものなり）

また藻塩草には名坂とありこれ等いずれも仮字にて浪険の意なり。皇國の地名には多く借り字を用いられたり。
また元明紀和銅六年（713）の詔に国郡郷名に好字をつけよ云々。

また民部式に郡里などの名に二字を用い必ずよき字を取りたる云々とみえまた、出雲風土記に神龜三年（726）郡郷の名の字を改めしこと多く見えたり。かれもとこの文字のままならず。字義もいたく変れるが、多ぞかし。

さて浪険浪逆などの字の佳からねば、かの嘉字

取るとありけん、度などにや情海とは書きけん。これを北南にわけて、北情浦、南情浦と井伊氏のちには省きて北浦南浦と云いけん。いまなお鹿島郡と行方郡の間を北の方に入りたるを、北浦と言ひ、行方より茨城新治信太の郡をかけて西の方に入りたるを西浦という。

（これは北浦に向かいたれば必ず南浦と言うべきなり。万葉集の鈔の趣にても南浦というべき様なり、されば西浦というは後の事なり）

また浮嶋うしろより、土浦の里に入りたるを今霞ヶ浦と言えり。この南情の海辺につきたる里を南情荘と云いけんが、僅かにこのあたりの荘名に残りけん。

さて浪逆を情とも書きしによりて、南情荘と書きけんが、ついに正しき字のごとくはなりしものなるべし。

またこの海辺につきたる村々に南荘というもあり。これはた、南情の情の字を省きて南荘と云えるなるべし。



【豆知識】

なま街道

木村 進

石岡の村上に「子は清水」という史跡がある。昔話や関連資料を昔調べていたことがある。その時に、松戸市常盤平にある「子は清水」のところには「なま街道」という街道が通っていたと書いてあったので昔ブログなどに書いたことがあり、それを今回紹介します。

「なま」は魚イサという漢字（魚が3つ）が使われており、この字は「鮮」の元字だそうです。

この「なま街道」は「鮮魚街道」とも呼ばれていたりといひます。

江戸時代中期以降、銚子は魚の一大産地となり、江戸の市場に新鮮な魚を運ぶ必要がありました。江戸時代初期に利根川の流れ方向を変えて、これを利用して関東や東北からのいろいろな物資が江戸に運ばれました。この時に霞ヶ浦から銚子近くで利根川に入り、そこを遡って上流の関宿で江戸川に舟でそのまま入り、そこを下って江戸の町に物資を運ぶルートが盛んになりました。しかし、魚などの品は鮮度が大切ですから、関宿を経由しては2日かかってしまいます。このため、銚子から舟で利根川を上り、成田線の布佐駅の近くで舟から馬に荷物を積み替えて松戸まで7里半（30km）位を陸路で運び、また松戸で舟に乗せ換え江戸川を下り、行徳辺りで新川の掘りを通って隅田川で日本橋まで運んだといひます。



現在、街道は一部「航空自衛隊下総航空基地」で分断されてしまっています。また、明治初めの鉄道開通でこの輸送は必要がなくなり、急に廃れてしまったようですが、銚子を

夜出発して翌朝布佐で馬に乗せ、半日かけて松戸へ運びその日の晩または翌朝までに江戸へ到着するスケジュールだったといえます。

この「なま街道」はできるだけ早く新鮮な魚を江戸に運ぶために作られたルートでしたが、それでも、夏場は暑く、この陸路はかなりきつかったようです。途中金ケ作(常盤平)にある「子和清水」では、この魚に水をかけて、鮮度を保ったのだそうです。

元々の街道としては木下(きおろし)と鎌ヶ谷(行徳)を結ぶ「行徳街道(木下街道)」がありましたが、町中を通る上に距離も長いいため、最短のルートとして定着したのと思われれます。

でも「なま」とはなんとも生々しい名前ですね。芭蕉が鹿島紀行でこの行徳街道を通って布佐で泊っています。魚の生臭さに寝られず朝早く布佐から鹿島へ船で旅立っています。調べるといろいろ出てきそうに面白いですね。木下(きおろし)と布佐の争いなどもあったとか、夜中でも関所を通行できたとか・・・いろいろ知らないことがあるものだと感心してしまいました。

【特別企画】

打田昇三の太平記(12) 巻第六

「鶏口となるも牛後たる勿れ」と言う諺がある。

単純に言えば大企業に雇われているより小企業でも社長になれ、と言う意味らしいが、中途半端な社長ばかりでも困る。其の諺を実行した源頼朝は死罪になるところを助命されたにも関わらず平家

に恩を仇で返して鎌倉幕府を設立した。しかし程なく源氏は消えて、政権は一番頭であった平氏系北条氏(政子夫人の実家)に転がり込む。北条氏も最初のうちは謙虚に暮らしていたが、其の中身の程を弁えず傲慢になった。是も放つて置けば自滅するのだが、西暦千三百年代の初め頃に第九十六代の後醍醐天皇が我慢し切れず、「理想的な政治をしよう」と倒幕運動を画策する。

理想的な政治とは何よりも国家・国民の為の政治だと思いが、後醍醐方式は世間知らずに起因する自分中心で独善的・妄想的な悪政であつたらしいから当然の結果として幕府が反発し、関係者が弾圧されることになり其の連鎖が徐々に広まって日本国中が戦乱の巷と化し庶民は苦しめられた。

六百余年後に日本国は米英両国に対し宣戦布告をしたが其の時に天皇が出した詔書には「万世一系の皇祚を踏める」とある。しかし南北朝時代の支離滅裂な混乱を思えば、お世辞にも万世一系とは言えない。其の誤った歴史観が昂じ「日本は神国である！」と勝手に決めて、碌な資源もないのに神頼みだけで無謀な戦争を始めたと言わせて貰っても過言ではあるまい。

太平記も巻第六に進み、以後はタイトルに反して太平では無く合戦場面が多くなり、登場人物も足利尊氏、楠木正成、新田義貞ら歴史的に知られた人物が下手な芝居で舞台を賑わせる事となる。

◎大平記・巻第六

○民部卿三位局御夢想の事

表題は「みんぶぎょうさんみのつぼね、ごむそののこと」である。民部卿とは、現在の国土交通

省と人事院、それに国税庁を合わせた様な官庁の長官である。中納言辺りの兼務が多かつたようだが此の場合は、天皇が勝手に自分の愛人を格付けしただけのこと、何の意味も権威もない。

元弘元年（一三三一）の九月には笠置城が落ちて後醍醐天皇も隠岐島へ流されてしまったから宮中に居た小役人やら女房達は途方に暮れた。特に後醍醐天皇のお気に入り女官で大塔宮の母親でもあつた民部卿三位局は心配も重なるし、宮中にも居られないが隠れ住む場所も無い。そこで日頃から御祈禱を頼んでいた北野天満宮に「参籠」と言うことで暫く置いて貰うことにした。天満宮の方では幕府に睨まれることを恐れたが、日頃の恩も有るので、取り敢えず拜殿の一隅を仕切り、何処かの女房が参籠していることにしてくれた。

其れ迄は贅沢を凝らした宮中で多くの女房たちに囲まれていたのに、神社の間借りでは仕える者も居らず、訪ねて来る者もない。お祈りばかりしていても悲しみが増すばかりである。或る夜、「忘れずば神も哀れと思ひ知れ

心づくしの古（いにしえ）の旅」と詠んで少し眠りかけた時に、装束を正して左手に梅花の枝を持ち右手に鳩杖（宮中から下賜される老人用の杖）をついた老人が夢の中に現れ枕許に立った。三位局が「訪ねて来る人も居ない隠れ家に迷い来たる者は誰ぞ。道に迷った者か」と訊ねたが返事は無く、気の毒そうな顔で梅の枝を置いて立ち去った。見ると枝には短冊が付けてあり、「廻り来て遂にすむべき月影の

しばし陰（くも）るを何嘆くらむ」と詠んだ一首が記されていた。目が覚めてから覚えていた歌の意味を考えると、都合の良い解釈で

はあるが刑務所暮らしをしている後醍醐天皇が無事に戻ってきて再び雲の上の暮らしが出来る……と言う縁起の良い夢になる。

夢を見た場所が神社の間借りであるから此処で喜ばない訳にはいかない。俄かに心を入れ替えて七日七夜の祈願を始めた。是が天に通じ、やがて後醍醐天皇は都に戻ることが出来るであろう……のお告げがあつた。原本には「感應忽ちに告あり、世既に澆季（ぎょうき）末世）に及ぶと言えども信心誠ある時は、靈鑑新たなり……と、彌（いよいよ）頼もしくぞ思し召しける……とあるが、行き場が無くて飛び込んで来た居候が勝手なお願いをしただけで其れが成就する筈は無い。後醍醐天皇の権力回復には、次章に出て来る楠木正成らの活躍や犠牲が有つてのことである。

○楠、天王寺に出張りの事、附・隅田高橋並びに宇都宮の事

元弘二年三月五日、左近将監時益と越後守仲時と言う二人の武将が幕府機関の両六波羅に赴任して来た。ここ数年間は常葉駿河守範貞が一人で二か所の長を勤めていたのだが、辞意を表明した為に交代したのである。関西地方では去年の十月に赤坂城で幕府に抵抗した楠正成が焼死体となって発見されており、其の後には湯浅孫六入道定仏が地頭に任命されていたから河内国も安泰と思われていたのだが、翌年四月三日になると、死んだ筈の楠が五百余の兵を率いて湯浅の居る城に攻め掛けてきた。是が幽霊にしては滅法に強い。

折り悪しく湯浅の城には食糧が乏しかったので本領地の紀州阿瀬川から五、六百人で救援物資を搬入することにし、其れを深夜に城内へ取り入れ

ることとした。ところが此の秘密計画が楠方に知られて、当日、湯浅の領地から武器・食糧を輸送して来た輸送隊は途中で楠軍に襲われた。

捕らえられた者の多くは兵士では無く領民であるから、楠軍は是を利用して大掛かりな芝居をすることとし、荷物の食糧は奪い、代わりに武器を馬に積んでから敵陣の前で救援物資争奪の演技を展開して見せたのである。是が大当たりで、城方は追われる輸送隊を救う為に城内へ誘導した。

武器を隠し持った敵を救援して城に入れたのであるから、結果は決まっている。同時に攻撃して来た軍勢に手の打ちようが無い湯浅入道以下の城方は降伏するほかは無くなった。楠軍は其の兵を味方に加え七百余騎の軍勢として五月十七日には住吉・天王寺辺りへ打って出てから渡辺の橋（大阪中心部）南方に布陣した。

此の知らせは都に届いたのだが「楠の軍勢が攻め上つて来る！」という内容なので、武士が走り回り、庶民が逃げ回る大騒ぎになり、六波羅には近隣諸国から駆け付けて来た幕府方軍勢が防御陣を布いて待ち構えた。ところが待っていても敵は姿を現さない。其処で「楠軍は少数」と判断した幕府方は防御から攻撃に転じる事にして武士と名の付く者は全て掻き集め、六波羅の奉行を指揮官として五千余の軍勢を天王寺に向かわせた。

五月二十日に京都を発つた此の集団は尼崎周辺に陣を取り盛んに篝火を焚いて大軍を誇示した。是を聞いた楠正成は、二千しか居ない軍勢を三手に分け、主力は天王寺辺りに伏せてから僅か三百騎ほどを渡部の橋の南に控えさせ、此方もわざと大掛かりに火を焚いて対峙した。敵に橋を渡らせる作戦である。明けて五月二十一日には分散して

いた六波羅の軍勢五千余騎が渡邊の橋付近に集結してきた。其処から見れば、川向うには瘦せた馬に碌な武装もしていない軍勢が数百しか居ない。

是を見た幕府方の隅田、高橋両武将が「和泉、河内の軍勢（楠軍）では、名の有る武将などは居ないのであるう」と気の毒に思いながら、此の連中を捕えて六条河原に曳き出し（処刑して）幕府に褒めて貰おう」と橋下の流れを渡って来た。

五千余の軍勢も其れを見て遅れてはならぬ！とばかりに橋の上から下から一斉に攻め寄せて来た。すると楠の軍勢は、一戦もしない中から僅か数本の矢を射ただけで我先にと逃げ出してしまった。

逃げて行く先は天王寺方面である。幕府軍は是を真面目に追い掛ける。天王寺の北側まで全速力で追い掛けると馬も兵士も疲れる。楠軍は、其処で軍勢を三手に分けて、一組は天王寺の東から、一組は西門から、残る一組は住吉から敵の大軍の目の前に出現させた。幕府軍は今まで追っていた敵に行く手を塞がれたので驚く。隅田、高橋両武将は、敵が少数なのは大軍が隠されている」と判断し、廣い河原で対戦しよう」と敵を広場へ誘き出して戦え！」と命令した。

命令に忠実な幕府軍は五千余騎の大軍が一斉に方向転換を始めたのだが、場所が狭い橋の上なので大混雑となり楠軍が碌に攻撃もしないのに踏み潰されたり落馬したり川に落ちたりして死ぬ者も多く、武装を捨てて逃げる者は有っても戦う者は居らず、五千余の幕府大軍は残り少なくなつて都へ戻る他は無かつたのである。

此の事が庶民に知られると、早くも翌日には六条河原の高札に一首の歌が書かれた。

「渡邊（橋が落ちた場所）の水如何ばかり早けれ

ば、高橋落ちて隅田（すだ）流るらん」

是に依り二人の武将は面目を失い、暫くは病氣と称して休職したらしい。幕府軍も大恥をかいいたので六波羅では何とかしなければと思つていたところへ鎌倉から有力な武将の宇都宮治部大輔公綱が来たので早速に評議を始めた。まず宇都宮は自分の失態では無いから偉そうに言つた。

「合戦の習いで運により勝ち負けが変わることは昔も今も同じであるが、此の度の事は誰が見ても指揮官のミスであり兵士の臆病が原因である。その為に世間の嘲りを受けているが鎌倉では幕府に手向かう者が有れば絶対には是を鎮めよ、との強い御意向なので今の状態では済まされない。

是は天下の一大事であるから、心を入れ替えて何があるうとも攻撃の手を緩めず、敵を退治する他は無いであらう」と

言われた方は面白く無いから「確かに其のおりであるが、我らは大きな痛手を受けたばかりなので此処は宇都宮殿にお任せするしかない」と逃げた。結局、余計な口出しをした宇都宮公綱は自分たちだけで出陣する羽目になつてしまった。

鎌倉の有力大名ではあるが此の時使役者として来ていたので直属の家臣は十数騎しか居ない。それでも逃げる訳にはいかず七月十九日の昼ごろに都を發つて天王寺へ向かつた。絶望的だが其の状態を見た周辺の武士たちが「此処で鎌倉の武將に加勢しておけば良い事も有らう」と次々に加わつて来たので総勢五百騎ほどにはなつた。

更に現場へ向かう途中で行き会つた者から誰彼の別なく馬を奪い、家来を捕えて足軽・人夫に仕立てたので都は恐怖に包まれたが軍勢は増えた。捕虜でも無いのに強制連行された兵士が主体の俄

か仕立て軍団は其の夜に高槻市付近まで進んで陣を構え夜明けを待った。兵士は諦める他は無。其の状況を知つた河内国の住人・和田孫三郎と言う者が楠の陣営に来て力強く主張した。

「：先日の合戦に負けて腹を立てた幕府が宇都宮と言う関東の軍勢を此方に差し向けており今宵は柱松（高槻）に到着しました。しかし其の兵力は六、七百騎に過ぎ無いようです。先に隅田・高橋が五千余騎で向かつて来たのを、我らが僅かの兵力で撃退しました。今は味方が勝ちに乗じている上に軍勢も揃つています。宇都宮が如何に武勇に秀でた武將で有らうとも案ずる事は無いと思うので、今夜のうちに逆襲して追い散らします：」

是を聞いた楠は暫く思索して、慎重に言つた。「合戦の勝負は必ずしも軍勢の多少に寄らず、唯、士卒が志を一にするか否かに依る。さらに大敵を見ては欺き（あざむき）小勢を見ては恐れよ！とも言う。是を思うに先の合戦に大敗した後に宇都宮が小勢で向かつて来たのは、一人も生きて帰らぬと覚悟したものであらう。宇都宮は坂東一と言われた弓矢取り（勇士）であるから相手にしては面倒である。此の敵に対して我が軍勢も命を捨てる事を厭うものではないことは分かるが対戦すれば大半を失うことになる。合戦は是からも続くのであるから此処は慎重で無ければならない。

“良將は戦わずして勝つ”と言う。其処で我が軍は明日にも此の陣を退いて敵の面目を保たせ四、五日後に周辺の山々に篝火を焚いて挑発すれば、気の短い坂東武者は怒つてもどうにもならず、結局は気疲れから引き揚げてゆくであらう：”そう言われると他の武將は従う他は無。天王寺の陣を引いた楠に合わせて和田、湯浅などの武士団も

其の場を去ってしまった。

そう言う状況は知らない宇都宮勢は夜明けと共に元気を回復したので、七百余騎の軍勢で天王寺に押し寄せて来た。酷い話で、先ず近隣の民家に火を掛け無駄な闘の声を発してから攻め込んで来たけれども撤退した敵が居る筈は無い。其れでも疑い深く「…此の辺りは道が悪く然も狭いので馬も転ぶ懼れが有るから用心しろ！」などと叫びながら天王寺地区の東西から突入して何度も走り回った。何度探しても去った敵は居ない。

その中に完全に夜が明けたので宇都宮は戦わずに勝った…と決めて天王寺にお札の参詣をしてから京都へ早馬で「天王寺の敵を瞬時に撃退しました…」と報告をした。京都では「今回の宇都宮軍の活躍は拔群である…」と褒め称えた。そうなるで一戦もせずに都へ戻るのもどうかと悩んでいるところに幸か不幸か数日後に楠の軍勢が地元の野武士など数千の兵を集め、それに数百騎の騎馬武者が付いて天王寺辺りに現れたのである。

其の軍勢が炎々と篝火を焚いて幕府軍を遠巻きに威嚇した。大和、河内、紀伊の山と言う山に無数の火が焚かれたので、其の勢力が何万騎も有るかに思われて不安である。それが三夜も続き少しずつ近づいてくる。宇都宮勢は、喜ぶべきか嘆くべきか考える暇もなく臨戦態勢を取り続けたので緊張で疲れ果て一旦は都へ引き揚げる事にした。戦果は無くても一応は敵軍を阻止した…と自己満足で納得し七月二十七日の夜に撤退したので翌朝には楠軍が入れ替わりで其の地を抑えた。

原本には「…誠に宇都宮と楠と相戦うて、勝負を決せば、両虎二龍の戦として、何れも死を共にすべし。されば互いに是を思いけるにや、一度は

楠引いて謀を外にめぐらし、一度は宇都宮退いて、名を一戦の後に失わず、是、皆、知謀深く思慮深き良将なりし故なり…」と人々が褒めたのである。合戦に出て、戦わずに済めば何よりである。

特に楠軍は天王寺に出陣したが近辺の民家に被害を与えず、部下の将兵を大事にしたので其の噂が広まり、我も我もと味方に付く者が増えて勢力が強大になった。そうなる、幕府軍も京都から簡単に討手の軍勢を出す訳にもゆかない。

○正成、天王寺未来記を被見の事

勢力を拡大した楠兵衛正成は元弘二年八月三日に住吉神社へ参詣して神馬三頭を献上した。翌日には天王寺に行き白色の鞍を置いた馬と白造りの太刀・鎧とを般若経転読のお布施として納めた。

高位の僧侶が経文を捧げ持つて来たので正成は此の高僧と対座し、自分の考えを披露した。

「此の正成が不肖の身を顧みず、幕府に逆らうという一大事を行なったのは無謀に思われるかも知れませんが、其れは後醍醐天皇から頂いた勅命を重んじる心からであります。其れにより身の危険を忘れて戦い、幸いにして両度の合戦に勝つことが出来ました。是は天が時を与え、仏神の御加護が得られたからであると自覚しております。

伝え聞くところ其の昔、聖徳太子は天皇制の未来を考えて此の寺で”日本の未来記”を書き置かせられたそうです。もし、其れを拝見出来れば、私は無駄な行動を省き効果的な活躍ができます」

—未来が余見出来れば誰でも都合は良いが、人間の社会では限界がある。世の中は甘く無い。

寺の僧侶は「…聖徳太子が、逆臣の物部守屋を討ち此の寺を創建され仏法を広めた時から持統天

皇の代に至るまでの記録三〇巻は“前代舊事本記(ぜんだいくじほんき)”として卜部(うらべ)宿禰が相傳し今に伝えて居りますが、実は、其の他に一卷の秘伝書が有ります。是は持統天皇以来の王業や天下の治乱などを記した文書ですが容易な事では見ることが出来ないものです」と言う。

正成は困ったが僧侶は「しかし私は書庫を開く方法を知っているので内密にお見せしましょう…」と言って秘文書を取り出してきた。正成は喜んで金軸の書を読んでも不思議な表現が有った。

「…人皇九十五代に当り、天下一度乱れて主は安からず、此の時に東魚来たりて四海を呑む。日が西天に没すること三百七十餘箇日、西鳥来たりて東魚を喰らう。其の後は、海内一に帰するに三年、猿猴(えんこう)猿同様の者)天下を掠すること三十餘年、大凶變じて一元に帰す…」

正成が此の文を考察してみると、先帝(花園天皇)は既に第九十五代に当る。天下一度乱れて主安からず…は此の事であろう。東魚来りて四海を呑む…とは逆臣・相模入道(北条高時)一族の専横政治であり、西鳥東魚を喰らう…は関東を滅ぼす人物が現れる事の示唆になる。また、日、西天に入るは…先帝の隠岐流罪を、三百七十餘日は明年の春頃に隠岐の国から還幸されて帝位に復される事で有ろうと都合良く考えた。そこで、黄金造りの太刀を其の僧侶に与えて(坊さんに刃物を与えるのもどうかとは思いますが…)秘文書の内容が世間に洩れないようにしたのである。

原文にはサーブスで「…現実が、記録のとおりになったのは不思議…」と書いてある。

続く